『if』

～天使たちよ～

作・佐野和敏

◆登場人物

柴山　舞　（高校三年生）
小宮恭介　（高校三年生）舞の幼なじみ
柴山秀夫　舞の父
医師・高木
女性看護師
天使Ａ
天使Ｂ
天使（舞）
天使（恭介）

※天使の舞・恭介は、人間の舞と恭介が演じることで、人数調整も可能である。

1

○迷界。天国と下界の中間地点。
薄っすらと霧のようなものに包まれている。
天使（柴山舞）が、辺りの様子を気にしながら現われる。
ややあって、別の方向から、天使（小宮恭介）が、やはり何かキョロキョロしながら現われる。やがて舞が恭介に気づく。舞は恭介を警戒している。
と、恭介も舞に気がつく。目が合う。

舞　「……」
恭介　「……」
舞　「……何よ」
恭介　「……何よって何よ」
舞　「あんた誰よ」
恭介　「君こそ誰だよ」
舞　「どうしてこんなところにいるのよ」
恭介　「君はどうしてこんなところにいるんだよ」
舞　「知らないわよ」
恭介　「俺だって知らないよ」

舞　「……怪しい」
恭介　「なにが？」
舞　「あなたでしょ、私を呼び出したの」
恭介　「呼び出した？俺が？なんで？」
舞　「な～んか、いやらしそうな顔してるもん」
恭介　「ちょっと待て！どういう意味だそれ！」
舞　「あっ！怒った！わざとらしい。やっぱり……」
恭介　「（文句を言うように）お前なぁ！」

雷鳴が轟く。
くっついて転がっている天使ＡＢ。

Ａ　「痛タタタタぁ……」
Ｂ　「いててて……」
Ａ　「ちょっとォ……いつまでくっついてるのよ？」
Ｂ　「（Ａの香りに酔っている）……ん……？……」

その様子を遠目に見ている、舞・恭介。

舞・恭介　「……」
A　「いいかげんに離れなさいよ！」
B　「（我にかえり）あっ……ああ……いかんいかん。何せ久しぶりだったもんで……」
A　「何が！」
B　「えっ！あー……いやーまいったまいった。ハッハッハッ……まさかあんな態勢で落ちるなんてな」
A　「あんたのせいでしょ！」
B　「悪リイ悪リイ……」
A　「大体あんたが……」
舞　「……あ、あの……」
A　「何！？」

天使Aが怒っているので、話しかけるのはまずいと思い、舞を止める恭介。

恭介　「いいえ……」

天使Bが舞、恭介に気づく。

B　「ああ！あれ！？来た！……来てくれた。良かった、良かった。（Aに）ねぇ！」

A　「まぁ……ね」

警戒している、舞・恭介。

B　「いやいや、とにかくよかった。上から降りてきた甲斐があったってモンだよ。なぁ」

A　「降りてきたんじゃなくて、落ちてきたでしょ」

B　「まあまあ……」

舞　「……誰なんですか、あなた達？」

B　「誰ですかって……そうか……知らないか……初めてだよね、我々と会うの」

舞　「はい……」

恭介　「なんなんですか？」

B　「なんなんですかって言われてもなぁ……」

A　「とにかく……事情を説明しなきゃ」

急にあらたまった態度になるB。

B　「コホン、よろしいですか？よく聞いてください。あなた方はすでに死んでしまっている。だからここ……というか（上を指差して）天国にいるわけです……ここ

まではいいですか？」

恭介　「ええ、確かに……」

Ａ　「あなた達は、天使になって過ごしているわけですね」

舞　「はい」

Ｂ　「しかし、巡りに巡ってくるものがある。ここにいる以上、必ず巡ってくるモノ……私達は、そのご案内をさせていただいてる者です」

舞　「案内？」

ＡＢ　「そう！」

恭介　「巡り巡ってくるもの……？」

ＡＢ　「そうです！！」

舞　「それって、どういう……」

Ａ　「今回はあなた方に、生まれ変わっていただこうと思っております」

舞　「生まれ変わる？」

Ｂ　「あの人……神様に頼まれて来たんですよ。（神様の真似をする）「今回、生まれ変わる天使を呼び出しなさい」ってね」

Ａ　「天使を呼び出すくらい自分でやればいいのにねぇ……」

恭介　「……で、なんで僕達が！？」

Ｂ　「順番ですよ。あなた方、前世では同じ日に亡くなっているんです」

舞　「そうなんですか！？」

B　「一九七三年、一月一日」
恭介　「確かに……」
A　「一人につき五十年というサイクルがありましてね。五十年経ったらもう一度人間として下界へ降りていただこうかと……」
B　「それで今回は、前世で同じ日に亡くなったあなた方に順番が回って来たということです……まぁ、ぶっちゃけた話、そういうことですわ」
A　「ぶっちゃけた、って……そのままじゃん」
B　「まあまあ……」
舞　「もう一度人間に生まれ変わる……？」
B　「お分かりいただけました？」
恭介　「でもそんなこと……いきなり言われたって……（舞に）ねぇ」
舞　「うん……」
A　「もちろん、無理にとは言いません。今までも、生まれ変わることを思いとどまった方々はたくさんいらっしゃいます。ですから、選択肢は二つ」
舞　「選択肢……？」
B　「つまり、あなた方がここに呼び出されたってことは、この二つの選択肢のうち、どちらか一つを必ず選ばなきゃいけないってことなんです」

A、宙に浮く、月を指差す。

A　「ひとつは、ほら、あの月が見えます？」
恭介　「見えるよ……なにあれ？」
A　「あれが下界への入口。あの中に入っていくと人間に生まれ変わることができます」

B、宙に浮く、星を指差す。

B　「もしくは、あの星……」
舞　「あれは？」
B　「元の場所に戻れる……というか、ここから天国へ戻るための入口です」

舞・恭介、月と星を不思議そうに見ている。

A　「どちらかを必ず選んでいただきます。しばらく時間を差し上げますので考えてみてください」
舞　「……はい……」

ABが消える。

恭介　「こんなことがあるんだなぁ……生まれ変わるなんて事、実際にはないと思ってたけどな……」
舞　「あの……ごめんね」
恭介　「ん？何が？」
舞　「ほら、さっき……あなたのこと、変態扱いしちゃって」
恭介　「ああ、別にいいよ。それより君はどうするの？」
舞　「どうしよう……あなたは、どうするの？」
恭介　「……ン……やめとこうかな」
舞　「どうして？」
恭介　「だってさ……なんか、面倒そうだし、ここの暮し結構快適だしさ……」
舞　「……ねぇ、聞いてみない？」
恭介　「なにを？」

舞と恭介の様子を、隠れて見ているＡＢ。

舞　「私達が生まれたあとの事……きっと知ってるよ、あの人達」
恭介　「それって何？俺達の人生ってこと？」
舞　「そう……私達が生まれたとしたら、どういう人生を歩むか……聞いてみようよ」
恭介　「うーん……」

舞　「私だってすぐには決められないし……だったら、聞いてから決めたって遅くはないと思うよ。人間として生まれて、その人生が素晴らしいものだったら、月。不幸なものだったら、星……それでもいいんじゃない」

恭介　「う～ん、そうだな……それから決めてもいいかもな……」

ＡＢ、突然現れる。

ＡＢ　「ダメです！！」

恭介　「わっ！！いたんですか！！」

Ｂ　「ダメです！断じてダメです！そんな事したらあなた方のためにならない！」

舞　「そんな事いわずにお願いします……」

Ａ　「だめったらダメ！！」

恭介　「んだよ、ケチ」

Ａ　「（恭介に絡む）ケチ、だあ！？どの口だ！そんなことをぬかしてるのは？それが人にモノを頼む態度か！おぉ！？」

Ａを止めるＢ、舞。

舞　「今までは、みんなどうしてきたんですか？」

B　「今まで……？」

Aに答えを求めるB。

A　「まあ……希望者には教える事もありましたが……でも……」

恭介　「だったらいいじゃん。俺らも希望者だよ」

A　「だめ！基本的には禁止されてるんです！自分の人生を知ってから生まれるかどうか決めるなんて……んなことばれたら私達が神様に怒られるんですから」

舞　「（Bに）でも、あなた達は知ってるんですよね？」

B　「え！？……」

舞　「私達が生まれてからどうなるか……知ってるんでしょ」

B　「いいえ、我々もまだ見てないから知りません」

A　「（Bを咎める）ちょっと！」

B　「あっ！（慌てる）」

舞　「見てない、って事は、見る事が出来るってことなんですね？」

B　「ん……まぁ、一応は……でも……」

恭介　「今までの人達には見せてきたんでしょ？」

B　「んー……まぁね……」

恭介　「それとも何？見せられない理由でもあるわけ？」

B　「……それは……」
舞　「お願いします。自分の人生くらい、知っててもいいじゃないですか」

B、Aに助けを求める。

A　「……分かりました。ただし、一つだけ言っておきます」
舞　「はい」
B　「後悔したって知りませんよ」
舞　「後悔なんてしません。（恭介に）ねっ」
恭介　「えっ……ああ……後悔なんてしませんよ……」
A　「だったらいいんですが……いいですか、人間となって生まれ変わってしまえば、ここでの記憶……天国でのあなた方の記憶は跡形もなく消え去る。つまり、ここであなた方が自分の人生を見たとしても、来世では覚えていないということです……分かりますね？」
恭介　「……はい」
A　「あなた方が、ここで見た人生を違うものに変えたくなっても……自分の運命を変えることは出来ないんです。分かりますね？」
舞　「……分かりました」
A　「いいでしょう。お見せしましょう」

タイムスリップしているような音が響く。

暗転

2

暗闇の中、赤ん坊の泣き声が聞こえる。

×　×　×（時間経過）

○通学路。舞が制服姿で出てくる。

舞　「ねぇ、早く！遅いよ！」

恭介がやはり制服姿で、やたらたくさんの荷物を持って現われる。

恭介　「あのな……いきなりジャンケンしようなんて……クソっ、はめられたぜ……」

舞　「重い？」
恭介　「重い。っていうか持てない。お前どうしてこんなにいっぱい持って帰るんだ？」
舞　「いいじゃない。私達、もうすぐ卒業だし。飛ぶ鳥跡を濁さずって言うじゃない」
恭介　「それを言うなら「立つ鳥」だろ……しかも、卒業はまだ先だし」
舞　「ねぇ、恭介。たまにはうちに寄ってけば……今日はお父さんも早く帰って来るって言ってたし……」
恭介　「そうだな……おじさんに会うのも久しぶりだし、たまには寄ってくか」
舞　「よぉし！じゃあもうひと勝負！」
恭介　「よし！さっきは不意をつかれたけど、今度は負けねぇからな！」

舞・恭介、ジャンケンをする。舞が勝つ。

舞　「よし！」
恭介　「あっ！」
舞　「やったー！じゃあその荷物、うちまでお願いね」

さっさと行ってしまう舞。

恭介　「うちまで、って……クソ……大体よ……」

恭介、ブツブツいいながら、荷物を持って歩き始める。
舞の父・秀夫が会社から帰ってくる。

秀夫　「？恭介！」
恭介　「（振りかえり）あっ、おじさん。お久しぶりです」
秀夫　「久しぶり……何だその荷物は？」

荷物を抱え、ふらついている恭介。

恭介　「お……た……く……の……娘さん……の……です……」
秀夫　「舞の？……」
恭介　「（倒れる）」
秀夫　「お、おい！大丈夫か！？」
恭介　「ええ……何とか」
秀夫　「舞に何されたんだ？」
恭介　「いえ、別に……ただジャンケンで……」
秀夫　「ハハハ……何だ、また負けたのか？……ハハハ……」
恭介　「（乾いた笑い）ハハハ……重そうだったから、わざと負けてあげたんですよ」

秀夫　「相変わらず舞はジャンケン強いのか？」
恭介　「（納得）ええ……この歳になればもう勝てるかなぁ……と」
秀夫　「どれ、私も手伝うよ。恭介にばかり持たせたら申し訳ないからな」
恭介　「そうですか……すいません。じゃあ、これお願いします……あ～、あと、これも。
　　これもお願いします」
秀夫　「これもか……舞の奴……ひどいなあ……」
恭介　「いいえ……わざと負けてあげただけですから……さあ、行きましょう」

身軽になる恭介。
秀夫、恭介帰っていく。

暗転

3

○柴山家。リビング。
舞が部屋の中を片付けている。
恭介の声が聞こえる。

恭介の声　「お邪魔しま～す」

リビングに入ってくる恭介。

恭介　「ふ～……やっと着いたよ」

舞　「何やってんのよ恭介……遅いなぁ……あれ、あたしの荷物は？」

舞の荷物を持って秀夫が入ってくる。

舞　「（罰が悪い）あぁ……お父さん」

秀夫　「何やってんだ舞、恭介にこんなに荷物持たせて……」

舞　「だって恭介がジャンケンで負けたんだもん」

秀夫　「だからって……こんなに沢山持たせなくてもいいだろ……」

舞　「ああ……ごめんね恭介。まあ、その辺に座ってよ」

恭介　「ああ」

舞　「あっ、そうだ。あたし洗濯物干さなきゃ！恭介、ゆっくりしてて！」

舞が去る。

秀夫　「まったく……」
恭介　「うまく誤魔化されちゃいましたね」
秀夫　「要領のいい奴だ」
恭介　「確かに！」

舞が、洗濯物を入れたカゴを抱えて戻ってくる。
一番上に恭介に渡すジュースが乗せてある。

秀夫　「？舞……これから干すのか？」
舞　「うん。今朝忙しくてやってられなかったから……」
秀夫　「もう夕方だぞ」
舞　「大丈夫、私の部屋に干しとくから」
秀夫　「部屋干しか……部屋干しは、何か臭くなるんだよな……」
舞　「だったら、自分でやってください」
秀夫　「いいえ、部屋干しで結構です」

二人のやり取りを微笑ましく見ている恭介。
両手がふさがってるので、カゴを振ってジュースを渡す舞。

舞　「はい！」
恭介　「おう、サンキュー……」

ジュースにブラジャーが絡まって、恭介の手元に一緒に落ちる。

秀夫　「舞……洗濯物を置いて来てからやりなさいよ」
舞　「だって……別に良いよね、恭介だもんね」
秀夫　「そういう問題じゃないだろ」
舞　「はーい、ごめんなさい」

洗濯物を持ってリビングを出て行く舞。

秀夫　「まったく……すまんなぁ……」
恭介　「いいえ……」
秀夫　「舞も段々、母さんに似てきて、家の事も良くやってくれてるんだが……なんか、調子が良くてな……あっ、スマンスマン、親馬鹿ぽいな、ハハハ……そう言えば恭介は、卒業したらどうすんだ？」
恭介　「僕ですか……僕は大学に行く頭は持ち合わせてないんで、俳優にでもなろうかな

ぁと……」

秀夫　「ほお！俳優か！言うねぇ～！演劇部だっけか？」

恭介　「違いますけど……」

秀夫　「でも、なんかできんだろ？ちょっと、やって見せてくれよ」

恭介　「そうッスか……じゃあ、ちょっとだけ」

秀夫　「そう来なくちゃ！」

恭介、どこへともなしに、大袈裟に合図をする。と、照明が変わり、音楽が流れる。
曲は『ロミオとジュリエット』風な曲。
照明が変わり、音楽が流れたことに戸惑う秀夫。

秀夫　「あれ？なに、これ？……どうなっちゃってんの？」

『ロミオとジュリエット』の芝居を、適当に演じ始める恭介。
しかし、ひどく大袈裟すぎて、話しにならないぐらい下手クソである。

恭介　「（ロミオになって）ああ！ジュリエット！君の名は……ジュリエット！そうだ、知っている！僕の名はロミオ！それも、知っている！ああ！可愛い僕の天使！（投げキッスを繰り返す）ンパ！ンパ！ンパ！ここへおいで！ゆっくり話そう！

（ジュリエットになって）ああ、ロミオ、ロミオ……」

あっけに取られて見ている秀夫。
そこに突然、舞がカラの洗濯カゴとラジカセを待って現れる。音楽はそのラジカセから流れている。そして、やはり大袈裟に続きを演じる。

舞　「ああ、ロミオ！」
秀夫　「舞……？なに……？」
舞　「どうして、どうして、どうして、あなたの名前はロミオなの？私が愛おしいと思うなら、いますぐ改名してちょうだい！いまからあなたは～！（考える）……そう！オミロ～！もしそれがお嫌なら、お命を頂戴いたす！」

身振り手振りの吹き矢で、オミローを狙っているジュリエット。
恭介は、オミローになって、大袈裟な身振り手振りでリアクションしている。

恭介　「わかった～！今日からオミローと呼んでくれ～！ジュリエット～！！」
舞　「オミロさま～！」

手と手を取り合う恭介と舞。

ラジカセの音楽を止める秀夫。

秀夫　「もういいから」

恭介　「ああ、もういいスか？」

舞、恭介から離れ、電気のスイッチを切り替える。

と、照明が元の部屋の電気に戻る。

秀夫　「なんだ、舞まで一緒になって」

舞　「だって……相手役がいたほうが気持ちが盛り上がるかなぁ……と」

舞、喋りながら、洗濯カゴを持って去る。

秀夫　「恭介」

恭介　「はい。どうですか」

秀夫　「気持ち悪い」

恭介　「は？」

秀夫　「ンパ、ンパって……お前は、俳優に向いてないから、辞めとけ。素人の私が見ても、それだけは分かる」

恭介　「やっぱりそうでしたか……自分でもなんかそんな気はしてたんスけど……」
秀夫　「寿司屋、継げばいいだろ？」
恭介　「やっぱ俺には、家継ぐしかないのかな……」
秀夫　「そうだよ。あいつだってそのほうが喜ぶだろ」
恭介　「そうなんですけど……親父、厳しいっていうか……」
秀夫　「そりゃあ、味にうるさいのは、職人のこだわりって言うもんだろ。その修行に耐えて親父越えを目指せ！」
恭介　「やっぱりそれしかないッスかねぇ……でも、舞はすごいッスよね。いつもトップだし……」
秀夫　「まったくだ。どうしてこんなにデキの悪い親父から、あんなに頭のいい子が生まれたのかな！トンビが鷹だな！……ハハハ」
恭介　「そうですね！おじさんのことはとっくに越えちゃってるっていうか、おばさんの血ですかね！ハハハハ……」
秀夫　「……まったく（だ）……（咳払い）恭介君」
恭介　「はい？……」
秀夫　「（ちょっとムッとし雰囲気を出しながら）笑い過ぎ」
恭介　「あ、すいません」
秀夫　「冗談だよ」
恭介　「もう！脅かさないでくださいよ」

秀夫　「ハハハ……」

舞が戻ってくる。

舞　「フー、やっと終わった。なーに話してるの？」
恭介　「いや、別に……」
舞　「ねぇ、お父さん」
秀夫　「ん？」
舞　「雨降ってきたけど」
秀夫　「ふーん、そうか……」
舞　「窓あいてたみたいだけど、大丈夫なの？」
秀夫　「あ！いかん、いかん！濡れるとまずいモノが沢山あるんだよ！」

秀夫、慌てて出て行く。
舞、ニヤニヤしている。

舞　「ハハーン。窓閉めといたもんね」
恭介　「ひでェ！いじめだよそれ」
舞　「愛情って言ってほしいなぁ」

恭介　「ゆがんだ愛情だ」
舞　「何言ってんのよ」
恭介　「大変だな、おじさんも……」
舞　「何よ、おじさんも、って……何か意味ありげね」
恭介　「（動揺を隠すように）いや、別に深い意味は……」
舞　「そうお？……まあいっか。ねぇ恭介、夕食の買い物に行くから、付き合ってよ」
恭介　「やだよ。荷物持たされるから……」
舞　「あら、鋭いわね」
恭介　「分かるだろ、普通」
舞　「さっすが～……昔より賢くなったわね」
恭介　「何？何か言ったか？」
舞　「今度はワザと負けてあげるからさ」
恭介　「イヤ！結構！私は実力で勝ちますから」
舞　「あら！強気ね。いいわよ～！じゃあ行きましょうよ」
恭介　「良いよ～！今度は負けねぇからな……」

立ち上がり奥に向かって叫ぶ舞。

舞　「お父さん！買い物に行ってくるからね！」

秀夫の声　「おう！……舞、窓閉まってるぞ！」

そそくさと出かける舞、恭介。

暗転

4

○柴山家・リビング。
舞がパジャマ姿で入って来て勉強を始める。
秀夫が仕事から帰ってくる。
父が帰ってきた事に何か安心感を覚える舞。

秀夫　「なんだ舞。まだ勉強してるのか？」
舞　「うん。もうすぐ模擬試験があるんだ。その結果で志望校が決まるんだよ」
秀夫　「ふーん……時代は変わるな……私なんか、働いてばかりだったんだがなぁ……」
舞　「でも、そうやって一生懸命働いてたからお母さんとも出会えたわけでしょ？」
秀夫　「まあな……それがなかったらお前だって生まれてなかったわけだしな」

舞　「だよね！もし、お母さんとお父さんの子じゃなかったらどうなるんだろ？」
秀夫　「そりゃお前……かなりまずい展開だろ……」
舞　「うん！かなりまずいよ！」

舞、秀夫互いに笑う。

舞　「……ねぇ、お父さん、私、あさって三者面談があるんだ」
秀夫　「え！？あさって？なんか急だな……」
舞　「いいよ、来なくて……あさっては大事な会議があるんでしょ。私、知ってるから……だから言わなかったんだ」
秀夫　「来なくていいって……行かないわけにはいかないだろう……よし、分かった。必ず行く」
舞　「無理しなくっていいんだよ」
秀夫　「何言ってんだ。会社クビになっても行くぞ。大事な娘の進路が決まるんだ放っておけるか」
舞　「ありがとう。じゃあ、あさって一緒に学校行こうよ……」
秀夫　「そうだな。久しぶりに一緒に行くか」
舞　「うん。お父さん明日も早いんでしょ……早く寝たほうがいいよ」
秀夫　「じゃ、先に休ませてもらうかな。明日もまた接待だしな……やれやれだ」

舞　「大変だね」
秀夫　「明日は早く帰って来たいんだが……なにしろ社長が一緒だから……断わりにくくてな」
舞　「付き合いも大事だもんね」
秀夫　「……すまんな」
舞　「大丈夫だよ。ほら、寝た寝た」
秀夫　「うん（去りかけて）……舞」
舞　「なに？」
秀夫　「あんまり無理するんじゃないぞ」
舞　「うん」
秀夫　「ん……おやすみ」

秀夫去る。

舞　「……よーし、もうひとふんばりがんばろ！」

舞、再び机に向かい勉強に励む。

暗転

5

○柴山家。リビング。
翌日。リビングに灯りはついているが舞の姿はない。
仏壇が、『結婚記念日おめでとう』の垂れ幕やのぼり、横断幕などで、可愛く飾り付けしてある。

秀夫の声　「ただいま～……すまんな舞……」

秀夫が手土産の寿司・ケーキを持って、ほろ酔い気味で入ってくる。

秀夫　「ほら～、舞～～！お土産買ってきたぞォ……いやぁ、今日はまいった……社長がな……あれ？もう寝てるのか……（腕時計を見る）一時か……そりゃそうだな、普通なら高校生はもう寝てなきゃいかん時間だ……何やってんだ俺は……でっかい声出して……」

秀夫、仏壇に寿司をお供えし、手を合わせる。

秀夫　「遅くなってすまんな。ほら、お前の好きなケーキ買って来たぞ……待ってろよ、いま出してやるからな……」

皿を取りに行くが、足元がおぼつかない秀夫。
皿を持って戻ってくる。
ケーキを出し、皿にのせる。

秀夫　「あっ～！ケーキ倒れちゃったよ……」

指についたケーキを舐めながら供える。

秀夫　「ごめん、ごめん……ちょっと崩れちゃったよ……あっ、ちょっと待ってろ」

もう一度キッチンに行き、ビールを取って戻ってくる。

秀夫　「それじゃあ、お待たせ致しました……それでは、日付が変わってしまいましたが、結婚記念日にかんぱ（～い）」

と、突然、携帯電話が鳴る。

秀夫　「ん？……誰だよこんな時間に……」

モタモタしながらも電話を探し、出ようとするが切れてしまう。

秀夫　「あれ……（仏壇に戻りながら）何だよ切れちゃったよ……まあ、良いか。それでは改めまして、かん（ぱ～い）……」

また電話が鳴る。

秀夫　「！またか！」

電話に出る。

秀夫　「あ～、しもしも……なんちゃって……」

携帯電話を手に恭介が現われる。

恭介　「あっ、すいません……恭介です」
秀夫　「……恭介か？どうした？こんな時間に」
恭介　「今までどこに行ってたんですか？電波、全然、届かないんですけど……」
秀夫　「え！？ああ……いやぁ、すまんすまん、ちょっと仕事でな……どうした？こんな時間に……舞ならもう寝てる（ぞ）……何！？」

暗転

6

○病院（病室前の廊下～病室～診察室）。
殺風景な廊下に長椅子が置いてあり、恭介が座っている。
その前に舞の病室がある。
病室内では看護師が検温等の作業をしている。

秀夫の声　「恭介！」

現れる秀夫。

秀夫　「舞は？！」
恭介　「寝てます」
秀夫　「そうか……」

秀夫、病室に入ろうとするが、

恭介　「だめです。今、看護師さんが中で……」
秀夫　「なぜだ！私は父親だぞ！」
恭介　「でも……」

看護師、病室から出てくる。

看護師　「静かにしてください」
秀夫　「あの！柴山舞の父親ですが……舞は？娘の容態は？」
看護師　「お父さんですか？」
秀夫　「はい」
看護師　「娘さんは今寝てます」
秀夫　「はぁ……しかし……」

恭介　「おじさん。とにかく今は落ち つかないと……」
秀夫　「君は他人だからそんな落ち着いてられるんだろ！舞は私の娘なんだよ！」
看護師「柴山さん。他の患者さんもいるんですから、もう少し静かにお願いします」
秀夫　「……（罰悪そうに頭を下げる）」
恭介　「はい……」
看護師「どうぞ……お静かにお願いしますね」

秀夫と恭介を、病室に招き入れる看護師。
ぎこちなく頭を下げる秀夫。
看護師、去る。
病室に入る秀夫、恭介。

秀夫　「舞……」

舞が寝ている姿を見て安心する秀夫。

秀夫　「……恭介……」
恭介　「はい……」
秀夫　「ひどい事を言ってしまった。すまない」

恭介　「いいえ。気にしてませんから」
秀夫　「あるがとう……そう言ってもらうと助かるよ」
恭介　「いいえ」
秀夫　「舞に何があったんだ……」
恭介　「それが僕にもよく分からないんです……突然のことでしたから……」
秀夫　「学校でか？」
恭介　「ええ……」

白衣姿の医師・高木が入ってくる。高木の後ろに先ほどの看護師がいる。

高木　「柴山さんですか……」
秀夫　「……はい……」
高木　「わたくし、高木と申します。お嬢さんのことでちょっとお話しが……」
秀夫　「舞の……」
高木　「ええ。どうぞこちらへ……」

秀夫、高木につれられて去る。

恭介　「……」

看護師「大丈夫よ、心配しないで……」
恭介「……はい……」
看護師「彼Ａなの？」
恭介「え？……いいえ……そんなんじゃ……」
看護師「そうぉ……？私にはそうは見えないけどな。お父さんも、すぐ戻ってくると思いますから」
恭介「はい」

看護師去る。

×　×　×（時間経過）

○診察室。
高木に案内され秀夫が入ってくる。

高木「どうぞ」
秀夫「はい」
高木「……実は……申し上げにくい事なんですが……お嬢さんは難病を患っています」
秀夫「……難病？……」

高木　「はい……骨髄異形成症候群という病気です」
秀夫　「骨髄……どんな病気なんですか？」
高木　「ひと言で申し上げますと、血液の病気です……ガン化すると白血病になる可能性が高い病気です……」
秀夫　「白血病……確かなんですか？……」
高木　「間違いありません……しかも、かなり進行しているようです」
秀夫　「……進行……そんな……」

放心状態の秀夫。

高木　「娘さんは、授業中にいきなり倒れたそうです。保健の先生は、貧血かと思ったらしいんですが……こちらで念のために検査してみましたら……」
秀夫　「先生……娘はどうなるんですか……助かるんですか！？」
高木　「最善の努力は尽くします。しっかりと治療をすれば、助かる確率は高い、というデータもあまります……」
秀夫　「本当ですか？！じゃあすぐに治療を！」
高木　「……ただ……」
秀夫　「ただ？……なんですか？」
高木　「……柴山さん……」

秀夫　「はい……」
高木　「場合によってはなんですが、抗がん剤治療になるかもしれません……」
秀夫　「……抗がん剤治療……」
高木　「検査の結果が明日の朝には出ます。その結果を待って、すぐにでも治療に入りたいと思っております」
秀夫　「……そうすれば娘は助かるんですか？」
高木　「私どもはそう考えております」
秀夫　「……本人にも話しをしてみます……」
高木　「そうして下さい。また明日の朝、お呼びしますので……」

頭を下げ診察室を出て行く秀夫。

×　×　×（時間経過）

○病室。恭介が舞を見つめている。
秀夫が戻ってくる。

恭介　「おじさん！どうでした？」

恭介をうながし廊下に出る秀夫。
ついて行く恭介。

恭介　「おじさん……」
秀夫　「……ん……血液の病気だそうだ……」
恭介　「血液の病気！？……」
秀夫　「……白血病になるかもしれないらしい……」
恭介　「……白血病……でも、手術とかすれば治るんでしょ！？」
秀夫　「……ああ……恭介……私は何がなんだか分からなくなってきたよ……」
恭介　「……え……」
秀夫　「これが夢だったらいいのにな……」

途方にくれる秀夫。

恭介「……おじさん……（振り返り）舞……」

力なく去る恭介。
廊下の椅子に腰かける秀夫。
舞の声が秀夫の心の中にこだまする。

舞の声　「お父さん……あさって三者面談があるんだ……いいよ、来なくて……大事な会議があるんでしょ……私、知ってるから……だから言わなかったんだ……無理しなくっていいんだよ……無理しないで……」

秀夫の姿が次第に見えなくなって行く。

暗転

7

○病院（病室前の廊下～病室）

秀夫が長椅子で居眠りをしている。

恭介が秀夫を揺り起こす。

恭介　「おじさん！……おじさん！」

秀夫が目を覚ます。

恭介　「大丈夫ですか？」
秀夫　「……恭介……」
恭介　「何か、うなされてるみたいだったから……」
秀夫　「そうか……ありがとう」
恭介　「どうかしたんですか？」
秀夫　「いや……ちょっと夢見てた。今、何時かな？」
恭介　「七時です」
秀夫　「七時か……舞は？」
恭介　「さあ？……」
秀夫　「……そうか……」

病室内にも、朝の日差しが差し込んでいる。
舞は看護師と談笑しながらも、参考書を手に勉強している。
看護師が出てくる。

看護師「おはようございます」
秀夫・恭介　「おはようございます」
看護師「お嬢さん、もう起きてますよ」

秀夫　「ほんとですか？」
看護師「どうぞ」
秀夫　「ありがとうございます」

そこへ、高木が入ってくる。
看護師に扉を閉めるように促す高木。

高木　「柴山さん。検査の結果が出ました。やはり娘さんは至急治療を始めた方が良いと考えます。本日、午前十時より、治療を進めて行きたいと思います……よろしいですか？」
秀夫　「治療ですか……ちょっと話してきます」
高木　「お願いします」
恭介　「おじさん……」
秀夫　「……（頷き）」

病室内に入る秀夫。
恭介は廊下で待つ。
勉強している舞。

舞　「あ……お父さん……」
秀夫　「舞……どうだ、具合は？」
舞　「うん。良いよ」
秀夫　「そうか……良かったな……あのな、舞……」
舞　「お父さん、私知ってるよ……骨髄異形成症候群っていう病気なんでしょ……」
秀夫　「えっ？……」
舞　「さっき先生から聞いたの」
秀夫　「！あの医者が喋ったのか……？」
舞　「違うよ、私が無理やり聞いたの。自分のことだから知っておきたかったの」
秀夫　「……じゃあ……治療のことも……」
舞　「……うん」
秀夫　「心配しなくても大丈夫だからな……お父さんがついてるんだから……だから……」
舞　「（まっすぐに天井見上げて）私、治療受けるよ」
秀夫　「えっ……」
舞　「（明るく）助かる可能性が高いんだったら、受けるべきよね」
秀夫　「……しかしなぁ……」
舞　「大変な治療なんでしょ……髪も抜けるかもしれないって」
秀夫　「……うん……」

舞　「しょうがないよ」
秀夫　「……舞……」
舞　「お父さん、そんな深刻な顔しないで。私は大丈夫。死ぬわけじゃないんだから」
秀夫　「……うん……」
舞　「わたしが、お父さんより先に死ぬわけにはいかないでしょ？」
秀夫　「……そうだな……」
舞　「それに、私が死ぬ時は恭介の最期も見届けてからじゃないとね」
秀夫　「そうだな……」

舞、秀夫、笑い合う。

舞　「お父さん、私ね、この大学受けることに決めたよ」

舞、大学の入試問題集（赤本）を秀夫に見せる。

秀夫　「へぇ～……おまえこんなの持ってたのか……（しばらくそれを見て）……ん？……お前……ここって……あれだろ……」
舞　「あれ、って？」
秀夫　「つまり……その……一橋だろ」

舞　「うん」
秀夫　「すごいな……はじめて見た……この歳になって、まさか一橋の問題集にお目にかかろうとは……わたしには一生、縁がないと思ってたのに……はぁー！……何が書いてあるんだこれ？全く訳が分からん……」
舞　「その大学、受けてもいい？」
秀夫　「ああ……良いも悪いも、お前の決めたことだ。でも、あまり無理するんじゃないぞ」
舞　「無理なんてしてないって……」
秀夫　「しかしな……ここまで行くと先生達の期待もかなり大きいだろうし……」
舞　「大丈夫。わたし、そういうことはあまり気にしないタチだから」
秀夫　「そうか……ならいいんだが……（独り言）俺に似ずプレッシャーに強いんだな」
舞　「ん？何？何か言った？」
秀夫　「え？いや……（問題集を見ながら）……これ、家でやってたのか？」
舞　「うん。それと、さっき目が覚めてからも少し……」
秀夫　「ここでもか？！」
舞　「うん」
秀夫　「すごいな……で、試験日はいつなんだ？」
舞　「もうすぐだよ。あと三ヶ月ぐらいかな」
秀夫　「三ヶ月、か……」

舞　「大丈夫でしょう？受けてもいいでしょう？」
秀夫　「ああ、私は構わんが……大事なのは、お前の体だからな」
舞　「うん」

高木と看護師が入ってくる。
扉のとこに恭介も立っている。

高木　「柴山さん、そろそろ準備を始めますので……」
秀夫　「でもあの……まだもう少し時間が……」
舞　「お父さん。大丈夫だから……治療するのは私だよ。元気出して。私もがんばるから」
秀夫　「しかし……まだ心の準備もしていないのに……」
舞　「私はいいから。たしか今日、会議だったよね。大事な会議なんでしょ、行かなきゃ」
秀夫　「バカ言うな。娘がこんな時に……こっちのほうが大事に決まってるだろ」
舞　「……ほんとに？……」
秀夫　「何言ってんだ、当たり前だろ」
舞　「（にっこり笑って）……うん」
秀夫　「舞……いいんだな」

舞　「うん……」
秀夫　「（少し微笑んで）そうか……そうだな……」
舞　「うん」
看護師　「それじゃあ、行きましょうか」
舞　「はい」
秀夫　「お願いします」

看護師に付き添われ、病室を出て行く舞。

舞　「……お父さん」
秀夫　「ん？……」
舞　「ありがとう」
秀夫　「……いや……それはこっちの台詞だよ……」
舞　「恭介もありがとね」
恭介　「……おう！……」
舞　「うん」

病室を出て行こうとする舞。

恭介　「舞！、頑張れ！俺もついてるぞ」

舞、ニッコリ笑って頷き、出て行く。そのあとを追うように出て行く恭介。

高木　「（秀夫に）それでは……」

高木も出て行こうとする。

秀夫　「先生、ちょっとお話しが……」

高木　「なんでしょう」

秀夫　「実は……三ヶ月後に……娘は受験がありまして……」

高木　「受験ですか……？ちょっと……無理だと思いますが……」

秀夫　「なんとかなりませんか？本人も頑張ってるんで、受けさせてやりたいんです」

高木　「そうはおっしゃいましても……三ヶ月後は大事な時期でもありますから」

秀夫　「そこをなんとか……試験の日だけでも！本人の望みをかなえてやりたいんです！

このとおり！」

秀夫、高木の前に土下座する。

高木　「ちょっ……柴山さん、そんなことしないでください。わ……分かりました。ただし、その時にご本人の容態が安定していたら、ということでよろしいですか？」
秀夫　「本当ですか？」
高木　「ええ。ご本人がそうお望みなら仕方ない。何とかしましょう」
秀夫　「ありがとうございます」
高木　「では……また後ほど……」

高木が去る。

秀夫　「よろしくお願いします」

秀夫、高木の後ろ姿に深々と頭を下げる。

暗転

8

○病院。舞の病室は、個室に移っている。

部屋には、冷蔵庫、テレビ、洗面台、トイレ等、自宅の部屋のように全てが揃っている。
壁にはカレンダーが掛けられ、試験当日に丸印がつけてある。
看護師が受験に行く為の準備を手伝っている。
ノック音。

看護師「はい……どうぞ」

恭介が入口から顔を出す。

恭介「よぉ、久しぶり……元気そうだな」
舞「よっ！」

入って来る恭介。

恭介「しかしお前すごい部屋だな、ここは……病院にこういう部屋があるんだ……」
看護師「病院だって、こういう病室もあるのよ。個室だけだけどね……」
恭介「へえ～……また急に入院するって言うから、ビックリしたよ」
舞「ああ……なんかあったときに、病院にいたほうが安心だからって、試験前一週間

は入院しとけって言われて……」

恭介　「確かに安心だけど……この部屋に、一週間……それはそれで羨ましいような……
でもここならゆっくり勉強できたろ？」

舞　「まあね」

恭介　「あー、そうだ、そうだ。これ」

紙袋を舞に渡す恭介。
受け取って中身を出す舞。
中からマフラーが出てくる。

恭介　「寒いしな……冷やしちゃいけないかと思ってさ」

看護師「あら、恭介君、中々やるじゃない」

恭介　「え？まぁ、たまには……（舞に）なっ」

嬉しそうにマフラーを首に巻く舞。

看護師「良いじゃない、舞ちゃん。似合うわよ（恭介に）ねぇ」

恭介　「ん、まぁ……良いよ……あっ！それからもうひとつ入ってんだよ」

舞、袋の中をもう一度覗きこむと、何やら怪訝そうな顔になる。
袋の中の物を取り出すと、必勝の鉢巻が出てくる。

看護師「何、これ？」
恭介「いや、これをね、こうやって巻いて受験に望むと、より一層気合も入って良いかなぁ～と……」

と、言いながら舞の頭に鉢巻を巻きつける恭介。
出来上がりを見て、吹き出す看護師と恭介。
舞、膨れっ面で鉢巻を取って恭介に投げる。

舞「コラ～！ぶっ殺すぞ！こんなんで試験受けれるか」
恭介「ごめん、ごめん。そんな怒るなって……お前の緊張を少しでもやわらげてやろうかなぁ……って」
看護師「ごめんね、舞ちゃん。私まで笑っちゃって……」
舞「いいえ、いいえ、いんです……仕込んでた、こいつが悪いんですから」
恭介「まぁ、あんまガンバんないで楽に行けよ、楽に……」
舞「うん……ありがと」
恭介「体の調子、何ともないか？」

舞　「うん。絶好調よ！」
恭介　「おう！いいねえ！試験会場まではどうやって行くんだ？」
看護師　「タクシーよね？」
舞　「うん」
恭介　「そうか」

秀夫と高木が入ってくる。

秀夫　「舞。そろそろ、行くか。タクシー来たみたいだし」

看護師が手伝う。

高木　「しかしよくここまでよくなられたものだ。びっくりしました」
看護師　「頑張ったもんね」
舞　「はい」
恭介　「こいつはめったなことじゃ死にゃしませんよ。（舞に）なっ！」

舞、恭介をぶったたく。

恭介　「うお！！いって！！」
高木　「元気そうで何よりですな」
秀夫　「じゃあ先生、行ってきます」
高木　「ええ。（舞に）くれぐれも無理をすることのないように。いいですね」
舞　「はい」
高木　「よろしい。では玄関までお送りしましょう」
看護師　「舞ちゃん、頑張ってね」
舞　「はい」
恭介　「舞、大丈夫だからな。楽にな」
舞　「おう！」

舞、秀夫、高木が去る。

恭介　「行っちゃった……」
看護師　「大丈夫よ、舞ちゃんなら」
恭介　「ええ、心配はしてないつもりなんですけど……やっぱ何か心配で……」
看護師　「何言ってんの。恭介君がそんな事でどうするの！」
恭介　「そうですね」
看護師　「そうよ！」

恭介　「はい！」
看護師「じゃあ、私もちょっと戻るわね」
恭介　「はい！」

看護師出て行く。
ひとり病室に残る恭介。

恭介　「しかし、ホントにスゲーなぁ、この部屋……俺の部屋より全然良いよ」

舞が勉強したノートの束を見つける。

恭介　「これ……全部……あいつが勉強したのかよ……すげえな、あいつ……俺たちの知らないところで、こんなに頑張って……こりゃ、絶対受かるわ、これで落ちたらおかしいよ、一橋！」

と、ノートの間から何か紙切れが落ちる。

恭介　「ん？何だこれ？……ん？……（読む）これって……」

恭介の表情が険しくなる。

恭介　「……あいつこんな事を……あの馬鹿……」

暗転

9

○舞の病室。試験に行く前と何も変わった所はない。
陽が西に傾きかけた頃、舞が試験から帰ってくる。
疲れている様子だが、試験内容を思い出しながら答え合わせをしてる。
その表情は喜んだり、不安そうになったり、複雑である。
恭介が見ていたノートを出し、答えの確認をする。
と、恭介が見つけた手紙に気づく。手にとって見つめる。
突然、恭介が入ってくる。
手にプリンを持っている。

恭介　「よっ、お帰り」

舞　「！コラ！ノックしろ！」

舞、慌てて紙切れを後手に隠す。

恭介　「ごめんごめん。まだ帰ってきてないかと思って……これ買いに行ってたんだ。頑張ったご褒美にどうかなと思って……先生もＯＫって言ってたし」

舞　「ありがと……」

恭介　「いま、食べるか？」

舞　「……うん……」

何か落ちつかない様子の舞。

食べやすいように、お皿に移そうとする恭介。

恭介　「どうだった？受験生多かったろ？」

舞　「……うん……（なんだか落ち着かない笑顔）」

そのスキに手紙をノートの間に隠そうとする舞。

恭介、その様子を察し、

恭介　「……舞」
舞　「！」
恭介　「隠さなくたっていいよ」
舞　「！」
恭介　「それ……さっき問題集見てる時……見つけっちゃって……悪いとは思ったけど読ませてもらった……」
舞　「え……」
恭介　「それ……おじさんと俺にだろ……」

観念したように紙切れを出す。

舞　「……」
恭介　「……それさ、遺書のつもりなのかもしれないけど……そんなもの貰ったってちっとも嬉しくなんかないよ」
舞　「……」

手紙をみつめる舞。

恭介　「舞……弱気になるなよ。お前らしくないぞ！お前は、もうすぐ元気になって、大学にも合格して、それから大学卒業して……それから……それから俺と……」

舞　「……！え……？（驚いて、恭介を見る）……」

恭介　「諦めるなよ！……俺は諦めてないぞ。人生も！お前の事も！」

舞をしっかりと見つめる恭介。

舞、しばらく黙っているが、やがて、にっこり笑っうなずく。

舞　「うん！」

そして「遺書」を破き、ゴミ箱へ放り投げる。

恭介　「よし、それでこそ俺の舞だ！大丈夫だって！お前は何があったって死にゃしないよ……俺が守ってやるからな」

照れ隠しに、膨れっ面をする舞。

恭介　「何だよ……？」

近くにあるノートに言いたい事を急いで書く舞。

恭介　「なに！？……何でそんな偉そうな態度なの？」

舞　「……うん……」

恭介　「しょうがないだろ！俺のが偉いんだから……」

舞、ノートで恭介を叩く。

舞　「コラ～！偉くないわ～！」

恭介　「あっ、痛てっ！バカっ！」

ジャレ合う二人。

10

○病院。舞の部屋。

暗転

看護師が部屋の中を整理している。
秀夫が何やら落ち着かない様子で部屋の中を、オロオロ・ウロウロしている。

看護師「いよいよ今日ですね。合格発表……」
秀夫「ええ、なんか落ち着かなくて」
看護師「まだ、見に行ってないんですよね？」
秀夫「ええ……あ、いや、恭介が行ってくれてるんですが……」

ノックをして恭介が入ってくる。

恭介「こんにちは」
看護師「こんにちは」
秀夫「どうだった？！」
恭介「まだ行ってませんよ。こっちによって受験票持ってから行くって話だったじゃないですか……」
秀夫「あ～～！そうだったっけか！」
看護師「大丈夫ですか、柴山さん……」
秀夫「いやー……、ダメです。自分の事の方がよっぽど気が楽ですよ」
恭介「あれ？舞は……？」

看護師「いま、検査中ですよ」
恭介「あ、そうか」
秀夫「（時間を確認しつつ）恭介くん、そろそろ……」
恭介「ええ。じゃあ、行ってきます」
秀夫「ああ……すまんな……本当なら私が行くべきなんだが、何か、こう心臓に悪くてね……」
看護師「分かります。何かドキドキしますもんね、こういうの……」
秀夫「そうなんですよ」
恭介「で、結果はどうします？おじさんの携帯にかけましょうか？」
秀夫「いやいや、やめてくれ。それも心臓に良くない。いつ、かかってくるかと思うと気が気でならん」
看護師「あら！そんなに心臓がお悪いんでしたら、柴山さんもこの機会に是非心臓の検査でもしといた方がいいんじゃないですか？」
秀夫「やだなぁ、もう……からかわんでくださいよ」

恭介、看護師、笑う。

恭介「じゃあ結果が分かり次第、急いで帰ってきますから」

秀夫　「ああ……悪いがそうしてくれ」
恭介　「では、のちほど。いい返事を期待しててください」
秀夫　「ああ……頼むよ」
恭介　「じゃあ行ってきます」
看護師　「気をつけてね」
恭介　「はい」

恭介、出かける。
秀夫、落ち着かず大きくため息をつく。

看護師　「大丈夫ですよ」
秀夫　「ええ……」
看護師　「検査しますか？」
秀夫　「またぁ……（そういう事言う）」

高木が何やら思いつめた表情で入って来る。

高木　「……柴山さん」
秀夫　「あ、どうも先生。舞はどうですか？」

高木　「……それが……ですね……」

何やら思わしくない雰囲気を感じ取り、看護師の顔から笑顔が消える。

秀夫　「はい……」

高木　「……」

秀夫　「……先生……」

高木　「……」

高木、頭を下げる。

暗転

―

○合格発表の会場。恭介が受験票を手に入って来る。

恭介　「あー……何か緊張してきた……」

掲示板を見ながら舞の受験番号を探す。なかなか番号が見つからない。

恭介　「えーと、４８８０５（よんはちはちぜろご）、４８８０５（よんはちはちぜろご）……何だよ、どの番号も同じに見えてきたよ……ん？……シバヤマゴー……ナンチャッテ……ちょっと無理があるかな……（周りの視線を感じ、ブツクサと）まぁ良いか……（また掲示板を見る）」

暗転

１２

○病院。舞の病室。
ショックを受けている秀夫。
肩を落としている高木。
表情を強張らせている看護師。

秀夫　「……今、何ておっしゃいました？」

高木　「悪性化が進んでいます……手遅れです」
秀夫　「手遅れ……でも先生、だんだん良くなってきてるって言ってたじゃないですか？
　（看護師に）ねぇ……」
看護師　「……」
高木　「私もそう思っていたんですが……思った以上に進行が早かった……」
秀夫　「それじゃあ舞は？……」
高木　「……残念ですが……」
秀夫　「でも……まだ決まったわけじゃないんでしょ？！（助かる）可能性はまだあるわけですよね？！」
高木　「……癌細胞が広がりすぎました。もう……」
秀夫　「じゃあ娘を……舞を見捨てるって言うんですか？」
高木　「違います。我々も懸命に助ける方法を考えました。しかしながら、既に容態が悪化しすぎてて……残念ながら、もってあと数ヶ月かと……」
秀夫　「数ヶ月って……先生！……何とか、何とか娘を助けてやってくれ！なっ、頼むよ！
　（看護師にも）ねっ、お願いしますよ！」
看護師　「……」
高木　「申し訳ありませんが、我々の力ではもうこれ以上は……」
　秀夫、高木に掴みかかる。

秀夫　「あんた医者だろ！何とかしろよ！」

看護師、秀夫を止めに入る。

看護師「柴山さん！やめてください！」

秀夫　「おい！あんたよく簡単にそんな事が言えるな！まだ若くて経験が足りないんだろう！それなら他の医者を呼べよ！それでも人間か？！」

看護師「柴山さん！落ち着いてください！柴山さん！」

秀夫　「……うう……」

泣き崩れる秀夫。

高木　「申し訳ありません……ただ私は本当の事をお伝えしなければと……」

看護師「柴山さん……大丈夫ですか？」

ただただ、うなずく秀夫。

秀夫　「……はい……すいません……」

看護師「お気持ちはよく分かります！でもここは！舞ちゃんの為にもご自分をしっかり持たないと！」

秀夫　「……ええ」

恭介が明るい表情で入ってくる。

恭介　「ただいま帰り……ました」

高木　「それでは……また、後ほど……」

高木、看護師去る。
ふかぶかと頭を下げる秀夫。
軽く会釈する恭介。

恭介　「あのぉ……」

秀夫　「……ああ、ありがとう……どうだった？」

恭介、満面の笑み。

恭介　「やりました！合格です！おじさん！舞、合格したんですよ」

秀夫　「……そうか……合格したのか……ありがとう……ありがとう……」

異変に気付く恭介。

恭介　「……おじさん？どうしたんです？舞は？……おじさん」

秀夫　「……あと数ヶ月の命だそうだ……」

恭介　「……そんな……何で……今までこんなに頑張ってきたのに……舞！！」

暗転

I3

○迷界。

天使の舞、恭介が今おきた事を呆然と見ている。天使ＡＢが現れる。

Ｂ　「さあ……どうします？」

Ａ　「生まれ変わるかは……お二人の自由です」

恭介　「まさか、こんなことになるなんて……」

舞　「これが……私の一生……」
Ｂ　「誰だって、一度や二度は自分はこの世に生を受ける価値があったのかと思うことがあります」
Ａ　「でも、よく考えてみて下さい。最初から生まれる価値のない人間だったら、生まれてくるわけないんです」
Ｂ　「だからもう一度、自分というものを見つめなおしてみて下さい」
ＡＢ　「この世に生を受ける事って……何を意味しているのかなって……」
恭介　「……どうする……？」
舞　「……」
Ｂ　「どうします？」
舞　「……」
Ａ　「どうします？」
舞　「……私……生まれるよ」
恭介　「……えっ？」
舞　「私、一生懸命生きるよ。生まれ変って……自分の人生をできる限り、一生懸命生きる。（ＡＢに）決めました。私、生まれ変わります」
恭介　「俺も……（ＡＢに）俺も生まれ変わります」
Ｂ　「……わかりました。良いでしょ」
Ａ　「頑張ってね」

恭介　「負けませんよ、なっ！」
舞　「うん！」

天使ＡＢ去る。去り際に振りかえるＢＡ。

Ａ　「……変えてみてね……人生を」
舞・恭介　「うん！！」

みつめあう舞、恭介。
ＡＢが去り、舞と恭介のシルエットだけが幻想的に浮かび上がる。

幕